
私の守りたいもの...

みみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の守りたいもの…

【Nコード】

N3460P

【作者名】

みみちゃん

【あらすじ】

私の家族を中心に起こった不幸な出来事。

笑いや涙…

私に幸せなんてくるのだろうか…

幸せとは？

その答えは永遠にわからないだろう…

序章（前書き）

これからこちらの小説を読んでいただける方へ
私は復讐がしたいわけではございません。

なにがしたいわけでもございません。

ただただだれかに聞いてほしくて…

自分の心の中だけに置いとくには置ききれなくて…

私に対してどんな感情を抱いてもらってもいいですが私は間違っていないと自分で自信をもって言えます。

守りたいものだけは…間違つてないと…

同情してもらいたいとも思つてません。

文句を言いたい方もおられると思いますがよければ言わないでください。

ただこんなこともあるということを聞いてほしくて…

私が守りたいものだけは…

私が間違つてると思つてる方も多々おられると思います。

もちろんわかつております。

私が間違っているのかもしれない。

そのへんは理解しております。

最低なのは私だったのかもしれないということも。

時間があるときに少しずつ書いていきます。

お時間ある方がおられましたら暇つぶし程度でいいので見てくださ
い。

序章

私はある田舎で生まれ育った30歳のバツイチ男性です。

これから始まる小説は私にとって忘れることのできない悪夢です。
夢であればよかったのに…

ある秋の出来事。

私の父はある会社の役員でした。

その時の私の暮らしは普通か少し普通の人より裕福な暮らしをして
いたかもしれません。

あの時までには…

私の父は（以降、父）は役員といっても男兄弟の中で一番下の三男
でした。

なので会社で役員といっても名ばかりのもので実際はただのサラリ
ーマンと変わらないようなものだった。

それでも毎日楽しくやっていました。

すべてはここから始まった…

ここから始まる悪夢…

このころになると会社が倒産するという話をうわさでよく聞くようになりました。

父は長男、次男と仲が悪かった為しらなかった…

ただ、長男の博打好き、女好きや長男一家のありえない贅沢ぶりはわかっていました。

それでも小さい会社だったのですが会社自体は信用もありそこまでは思っただけだったようで…

ある日、父が社長室に呼ばれていつてみると…

会社が倒産しそうだから借金するから保証人になれと長男に言われたみたいで…

かなり悩んでいましたが会社が倒産することを思えばと思いハンコをつきました。

兄弟で築いた会社ではなくこの会社は父の父おじいさんが建てた会社なので父も倒産はさせたくないという思いで押したようです。

もちろんこれ自体が間違っていたのでしょう…

今思えば…

それから父は長男も心を入れ替えると甘い期待を描いていたようだった。

もちろんその期待はすぐ裏切られる。

ただここから少しの間は変なうわさなどは聞かなくなった。

だがこの頃から長男の息子が会社に入社し、自分の言うことを聞かない人間を邪魔者扱いするようになりました。

もちろん父も例外ではなかった。

父にはなにもいえなかったのだなにかあれば長男に影で言っただけ長男に言わしていた。

あげくに昔からいる人達を数人クビにした。

この時点で完全に身内会社じゃなく親子会社になってきた。

ただ次男はコビを売るのがうまかったので長男にもその息子にも好まれていた。

父だけはそんなことをしない人間なので身内の中では煙たがられた。ただその息子も父に直接文句は言えなかった。ので影でこそこそしていました。

それでも父は私や妹や母がいるので我慢して会社に通っていました。この時点で我慢せず辞めてくれていたらこんな辛い思いしなくてよかったのに…

今これを書きながら自分が情けなくて涙がこぼれそうになります。そしてこんなことが続いて一年が経ちました…

おじいちゃんの残したもの

あの出来事から一年くらいが過ぎた秋のこと…

いまだに長男の博打などはやまずそれどころか日に日にエスカレーターしているように見えた。

そのときくらいから一人の男が会社を出入りするようになった。

ただの長男の友達と思っていたら…

見た目でいうとちょっと怖いおじさんというか癖のありそうなおじさんだった。

まさかその男が…

その男が毎日出入りするようになった少ししたとき、長男が従業員の前でその男を紹介したのだ。

なんて紹介したかというところ…

今度新しい社長になるXさんと…

社員の人も動揺していたようだがなにも言えないままその日が終わった。

私の父がそのことを聞いたのは次の日に従業員から聞いたものだった。

その事実を知った父は長男に問いただしたようですが、おまえには関係ないの一点張り…

それでも問いただすと借金のかたに会社を乗っ取られたところ…

また借金を払い終われば会社は返してくれるからと…

世の中そんな甘い話がどこにある？

もちろんその男は会社を乗っ取る気で長男に近づき金を貸していたのだった。

それからしばらくの間、父には会社にこなくていいといったようです。

そんなことがあって寒い寒い年末になった…

だれが予想しただろうか…

醜い争いがこれから始まるっとは…

協力…

そんなことになっている年末…

長男の息子が我が家にやってきました。

今まで散々父をいびってきたのになんだろうと思いました。

精神的なことやお金のこともいろいろされていたので父も本当に腹をたてていた。

けどくるなりびつくり発言から…

会社を取り返す！と。

その会社を奪ったXはかなり悪い人のようで…まー一言でいうとやぐざ屋さんと変わらないような人の方だった。

長男もすごい金利をとられていたようで…

まーそんな人から借金しないといけない状況になってる長男が悪いのだが…

しいていうなら私などを含め周りが気づかなかったことも悪いのだ…言い訳ではないが長男は父の言うことなどを聞くような人間ではなかった…

そしてここから戦いが始まる。

とある弁護士の先生まで出てきて大きな話に。

父も少し株を持っていたのでXを解任するのにいろいろ手伝う。

このとき母が私に言った言葉は…今まで散々バカにされ続けてきたのに困ったときだけ助けてとは少しおかしいといっていました。

もちろん状況が状況なので理解はしていましたが…

このときの父の気持ちは長男が作った会社ではなく自分の父親が作った会社なので、できれば守りたいという思いで手伝っていたようです。

必死だったのに…

そして一月の末くらいだったかな。

そのXの解任に成功して社長にはその長男の息子が就くことになり

ました。

これから会社の借金のことなどいろんな問題が出るのはわかっていました。

父もできる限り協力する気でした。

この解任するまでの間にもたくさんの方がありました。

またいつか書く機会があれば書きたいと思いますがこれは省かせていただきます。

そして二月の頭くらいだったかな…

会社での話し合いが行われました。

この話し合いに行く前に父は私に、おまえらに苦労かけさせるかもしれないが…

と、意味不明な言葉をいつて出て行きました。

決別

うる覚えだがたしか寒かったな…

私は頭が悪いため家の近所で自営しております。

自営といってもみなさまが想像しているような自営ではございません。

かつこよく言うと言。

世間一般でいうと二トというものでしょうか…

一人で店でばけーつと父の帰りを待っていた。

3時間くらいしてからかな…

父が帰ってきた。

顔は真剣そのものだった。

帰ってくるなり母を呼び出し家族での話し合い。

まず最初に断っておきますが父がすべて正しいわけではございません。

もちろん父が悪い話もあると思います。

ただの結果論です。

これから会社を立て直すために借金をする。

その保証人に父にもなれと言われたのです。

もしだめだったときその借金を払えるような額ではなかった。

それでも父は悩んだそうだ。

ただ…父の頭によぎったのは…

長男の性格だった。

たしかに今回の出来事で長男はがんばっていた。

だれの目から見てもがんばっていたと思う。

私もすごいと思っていた。

ただ父の目から見れば少し違ったようだ。

今まで散々いびられてきたことや性格など。

お金の面では長男にそっくりなところ…

ならないと思うが万が一を考えると…

私がいうのもなんだが父は本当に家族思いな人間なのだ。自分の気持ちだけなら保証人になりたいと思っただけだし。けど、家族のことを考えるとともなれなっただろうで…

もちろん身内なら保証人になれよ！と言う方もおられると思います。実際そうかもしれませんが…

ただ父は断った。

そうすると会社は辞めてもらうといわれたそうです。

そして父は会社を辞めた。

帰り際に次男に、おまえは身内の縁を切るんだな。と言われた。

父はそれならそれでいいと言った。

そして帰ってきてこのことをは私に教えてくれた。

これからは身内はいないものだと思えと。

ただ父には母が健在^{おはあちゃん}だった。

そちらのほうだけ気にはなっていたようだが。その話はまたあとでその話をして父はこれから給料もなくなるから生活が苦しくなるかもしれないけど家族みんなでがんばろうと言った。

小さいながらも私が商売をしていたのでそちらをがんばろうと。

もちろん家族みんなでがんばろうと誓いあった。

お金のめんどいしんどいことがたくさん出てくるかもしれないが家族みんな仲良く平凡な日々が来るものだと思っていた。

父も母も私も…

本当に保証人になんてならなくてよかった。

これからあるさまざまな出来事を考えると…

このときくらいから父は胃が痛いと言い出していた…

決別（後書き）

今回の話を読んで気分を悪くした方もおられると思います。

父が悪いと思っただ方もおられると思います。

もちろん私自身それが間違いのない選択だったとは思っておりません。

正直わかりません。

気分を害された方申し訳ございません。

一時の幸せ。

それからしばらくして父の株を騙されとられるといったこともあったが一時の平凡な日々が始まった。

この株の話は私が悪かった。相手の言うことを鵜呑みにしてしまったから。

詳しい話をしたいけどこれは私の心の中に閉まっておきます…

この頃になると私の事業もそこそこ売り上げなど上がってきたため贅沢は無理だけど並の生活はできるようになりました。

父が一番気にしていた母も店おばあちゃんに来るようになり本当に普通の生活だった。

父がいなかったとき私はおばあちゃんとよく会話をしました。

よくおばあちゃんは私に父は保証人にならなくてよかった。

すべては長男が悪いと言っていました。

ここでもフォローではないけどすべて長男が悪いかはわからないこととです…

ただおばあちゃんはそう言っていました。

ただおばあちゃんは長男の家に住んでいたのでそれ以上のことは言わなかった。

それでも私のところに来るといつもニコニコ私にしゃべりかけていました。

父がいるときは父を二人で長話をしていました。

本当にどこにでもある普通の生活だった。

いつくらいか忘れたがある時期になるとおばあちゃんが来なくなりました。

私も気にしていたが父はもっと気にしていたようだった。

おばあちゃんが毎週通っていた病院をよく見にいつていた。

それでもおばあちゃんに会うことはできなかったようだ。

あるとき父の妹から店に電話があった。

私が電話をとったのだが…

内容は…

おばあちゃんは老人ホームに入っていると。

話を聞けば老人ホームに入ってから数ヶ月たってからの連絡。

それもおばあちゃんが父の顔を見たいといったから。

妹というのもこのときは長男に雇ってもらっていたので父のことをよく思っていなかった。

それでも老人ホームに入ったらそれくらい教えてくれてもよかったのにな。

仲が悪い父が悪いといわれればそれまでかもしれませんが。

その話を父にしました。

もちろん場所なども伝えました。

父は黙っていました。

悲しそうな顔で黙っていました。

聞いた次の日に老人ホームに家族でいくことにしました。

あんなおばあちゃん見たくなかったな…

久々の…（前書き）

私が病気のため少し間があいてしまいました。
またゆっくりと書いていきますのでお時間ある方は見てください。

久々の…

その日の朝から老人ホームに行くことになり用意をしていました。父はおばあちゃん（母）の好きな食べ物を買いにスーパーに出かけておりました。

そして車で二時間くらいかかるところまで車でいきました。行き道の父はずっと無言だった…

車の中で流れてるのはずっとラジオの音だけだった…

そして到着した。

外観は非常に綺麗な老人ホームだった。

中に入ってみると中も非常に綺麗で活気のある老人ホームだった。入り口でだれに面会かなどいろいろ聞かれ手続きをすました後その部屋にいった…

部屋は個室になっていて角部屋だった。

そしてドアを開けた。

開けるとおばあちゃん（母）が驚いた顔で父の顔をながめていた。以前は髪の毛を染めておばあちゃんといっても少しけばいおばあちゃんだったのだが…

髪の毛は真っ白になり体は以前よりだいぶ小さくなったおばあちゃん（母）がいた…

父とおばあちゃん（母）は無言で数秒見詰め合っていました。そして…

父はいきなり泣き出しました。

私の父は昔人間で本当に息子の私の前でも涙を流すような人間ではないのだ。

それでも泣いた。

もちろんおばあちゃん（母）も泣いた。
いくら孫といえど私と私の母が立ち入る場所はなかった。
その光景をみて私は母に買い物にいこうといって部屋をでた。

それから一時間くらいしてからかな…

部屋に戻ると二人ともニコニコしながら話をしていました。

そして私と母もその会話に混ざりいろんな話をしました。

二時間くらいいたのかな…

そしてその帰りに…父はおばあちゃん（母）に、また来るからご飯
いっぱい食べてちゃんと歩くんぞ！と、しきりにいつていました。
ニコニコしながらおばあちゃんもうなずいていました。

この日はこれで帰りました。

帰り道は父は普通でした。

ただ…帰ってきて母が家に帰って私と二人になったときに父は私に
自分にもうちよつと甲斐性があれば母を見たいと…何度も何度もい
っていました。

そのことを聞いた私は自分も情けないと思いきしくなりました。
父に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

このときに私は思いました。

私の父はとても親想いでいい人間だと。

本当に自慢できるいい父親だと。

私は仕事をがんばって父と母にだけはなに不便ない生活が送れるよ
うにがんばろう！と…

本当に心に誓ったときだった…

できる限りは…

おばあちゃんに会おうということで最低でも月に一度はおばあちゃんところに行くようにした。

もちろん仕事なので少しでも近いところに行く用事があれば毎回行っていた。

行くときはなにかおいしいものを買っていったり母におばあちゃんの好きなものを作ってもらったりと…

行くとおばあちゃんは私に結婚しないのか？と何回も聞いておりました。

今となつてはそれもいい思い出です。

少し遠くなつたけどおばあちゃんの顔を見て父も少し安心していったようだった。

この間にも小さなことはたくさんあった。

そのことはまた書く機会があれば…

そしてある朝の出来事だった。

未だに忘れることのできない出来事。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3460p/>

私の守りたいもの...

2011年10月8日12時14分発行